

人肉 バーガー(1)



小説のためのエスキース集
vol.3

天見谷行人

僕は人肉バーガーを頬張りながら、少し離れた席にいる三人組をそれとなく見た。

明らかにこの店に似つかわしくない三人組だった。全身黒づくめの三人のうち、二人は男性である。どちらもごつい肉体にスキンヘッド、黒のスーツに黒のネクタイ、黒のサングラスだった。もうひとり女性だ。黒のスーツがスレンダーな体を更に細く引き締まったボディラインに見せている。ストレートの長い髪は金髪だった。この三人は恐らくフランチャイズ本部から送り込まれた、スーパーバイザーとか言う幹部フタッフに違いないと僕は思った。

主に話をしているのは女性の方だった。どうやらこの女性が上司らしい。魅力的な金髪のロングヘアをかきあげながら、これも長すぎると思われる脚を、折りたたみ式のチェアのようにあくまで機能的に組み直した。いかつい黒づくめのスキンヘッドの男達は女の言う事を視線をそらさず聞いていた。

「だからさあ、こんな数字じゃダメよ。現状維持は一步後退。分ったわね」

「イエッサー」

男達は同時にうなづいた。

女は接客カウンターの方をじっと見つめていた。どうやら店員の接客の様子や、それにこの店の客層などをじっと観察しているようだった。

「ヒューマンバーガー大蔵ヒルズ店」は郊外型の直営店だ。駐車場もたっぷりあるし、国営公園の中にあって緑も多く、散歩がてらに立ち寄るには格好の立地条件を備えている。

店内は若いカップルや家族連れでにぎわっていた。僕はいつも持ち歩いているイヤープラグを忘れてきてしまった事を後悔した。せっかくの土曜日の午後だ。ここで座り心地のよいソファに身を持たせかけながら、静かに本でも読もうと思っていたのだ。

この店は先月改装工事が終わったばかりだった。以前とは比べ物にならない、とても素敵なインテリアにかわっている。

以前は固くて座り心地の悪い椅子と、食べこぼしの目立つ汚いテーブルが貧相だった。それにそのテーブルときたら、なぜかどれもが全く同じ寸法で一カ所だけ脚をちょん切ったように、安定が悪くグラグラしていた。それはまあいい。なにより僕が許せなかったのは、椅子から立ち上がる度に、

「ガガガガガッ ギギギギギッ」

床と椅子が擦れあうとんでもない音がすることだった。それでも、オリジナルブレンドコーヒーだけは何杯おかわりしてもよかったので、我慢しながらでも利用していたのだ。

窓際の席に座っていた僕は窓の外を眺めた。

国営大蔵ヒルズセントラルパークの豊かな緑が目にはいる。心も体もホッとリラックス出来る瞬間だ。

行き届いた管理のもと、よく手入れされたこの公園は僕のお気に入りだ。近くにはコンサートホールや図書館、美術館もあって、ひがな一日いても退屈しない。僕がこの街に転勤になって、会社が用意してくれた部屋がこの公園の近くだと知ったとき、これはラッキーだと小躍りして

喜んだものだ。

僕には住むところにこだわりがあったのだ。

独身の自分としては、交通の便や病院や、学校の近くとか、そんなことはどうでもいい。ただひとつ、どうしても譲れないのは、近くに大きな緑豊かな公園が欲しいという事だった。そしてその公園には池と遊歩道がある事。それに気軽に借りられるテニスコートも欲しい。この転勤によって僕の要望はほぼ完全な形でかなえられた。

明日は公園内にあるコンサートホールに行こうと思っている。二ヶ月に一度のニッキーランド本部主催チャリティーコンサートの日なのだ。僕はそれを毎回楽しみにしていた。今回は指揮オオザワとチェロのヨーヨー丸、新進気鋭のヴァイオリニスト、エミー宮本のアンサンブルが楽しめる。

僕にはにんまりとしながら、新商品のダブルクォーター人肉バーガーを頬張った。ジューシーな味わいが口一杯広がる。ボリュームもあって、これに野菜サラダとドリンクで590円という値段の設定は、人肉を扱うファーストフード店としてはかなり頑張っている価格だ。この新商品のコマーシャルは最近よく見かける。特に厳選された若い人肉を使っているという事で、早くも人気商品になっていたのだ。僕はあまり流行を追い求める質ではなかったが、そんなに売れている商品なら試しに食べてみるか、と思ったのだ。

「いややあああー、墓石セットほしいねん！ おかあちゃん、いややあああー、墓石セットおおー！」

四、五歳の子供が床に寝転がって手足をばたつかせて駄々をこねて暴れ回っている。黒尽くめの三人組も、他の客も、その親子に一齐に注目した。

「ーピンポンパンポンー」

店内のスピーカーからアナウンスが流れた。

「お騒がせして申し訳ございません。それでは店内の皆様、いつものように挙手をお願い致します」

店にいる全員が黙って手を挙げた。僕も手を挙げた。

「ご協力ありがとうございました。……業務連絡……作業班はM4作業を始めて下さい……ピンポンパンポン……」

いつものようにお揃いのキャップとユニフォーム姿のニッキーマウスが四人フロアに現れた。よく、テレビコマーシャルなどで見かけるニコニコした愛くるしい笑顔だ。

「はあ〜い。ようこそニッキーランドへ」

そしてオロオロしている母親と、まだギャーギャーわめいているこどもを担ぎ上げて、ニッキーランド行き直行バスに放り込んだ。

ニッキー達は素敵な笑顔を辺りに振りまく。

それは人肉処理のスペシャリストとしての誇りと、ヒューマンバーガー社を傘下に収めるニッキーランドグループ正社員としての自信に満ちあふれた笑顔だった。

「ねえ、これ素敵じゃない？」

オンナはヒューマンバーガー大蔵ヒルズ店のショーケースを眺めながら男をみた。

やや上目遣い、左斜め45度。口元の微笑み角度は13度を維持していた。これは彼女のおねだりモードだ。これで男は95%の確率で陥落する。それは彼女の過去の男性遍歴から割り出した確率論に基づいた数値だった。

男だって負けてはいない。眉を思いっきり上に持ち上げ、出来る限り目尻を下げる。甘い微笑と眼差し。オンナの心を86%の確率で蕩かせてみせる自信が彼にはあった。

「うん、なかなかいいんじゃない」

「じゃ、これにするわ」

ニッキーランドのキャップを被った店員がにこやかに応える。

「お決まりですか？」

男は店員のキャップのしたに隠された長い黒髪と、涼しげな目元を素早く盗み見た。

次はこの娘にしようか、と思いつつ、

「じゃあねえ、この、ジューシー照り焼きバーガーをツインで」

「ありがとうございます。オモチャは何になさいますか？」

「墓石セットのCで」

「ありがとうございます。お会計三十五万とびとび六十円でございます」

女性店員はショーケースの中からスワロフスキー製の墓石セットCを取り出す。まばゆいばかりの輝きが辺り一面に花びらのようにこぼれ落ちてゆく。

男はクリームゾンレッドのビロード生地に覆われた、箱庭を思わせる墓石セットのトレイから、ひとつのネックレスを取り出した。

無駄のない動きで女の背中へ体を移動させる。

顔は女の斜め後ろから息がかかりそうな程に近づける。

男はネックレスを慣れた手つきで女の首に付けた。

「似合うよ」

「うれしいわ」

伏せ目がちに女は微笑む。内心は、

「フン、たかが三十五万とびとび六十円でベッドまで付いて来させようたって、そうはいきませんからね」と思っているのだが、まあいい。

あと、どれぐらい貢がせるか、パンクしては元も子もない。生かさぬ様、殺さぬように搾り取っていけばいい。

これから先、起こるであろう様々な情景を想像すると、女はこらえきれず「クックッ」と小さく含み笑いをした。

「何か可笑しかった？ 僕の顔に何かついてるの？」

「ううん、そうじゃないの。昔の男をちょっと思い出しちゃったの」

「何番目のかな。興味があるね」

男はニヤリとした。

「ダメ、教えてあげない」

店内にアナウンスがひびいた。

「ジューシー照り焼きバーガー、ツインでお待ちのお客様、お席のご用意ができました」

男は女の腰に蛇のようにぬるりと手を廻し、奥の部屋へエスコートした。男の持った墓石セットのトレイから一枚の薄い紙切れが落ちる。それは販売促進キャンペーンで配布されるヒューマンバーガー割引券だった。それはあまりにも薄い紙だったので、何秒かの間、空中をフワフワと漂い、やがて床に落ちた。その時すでに男と女は個室に入った後だった。

床に落ちた割引券は裏返しになっていた。そこにはヒューマンバーガー社のメッセージが読めた。

「この度は墓石セットCをお求め頂き誠にありがとうございます。当ヒューマンバーガーでは、売り上げの一部につきまして恵まれない子供たちを早期処分するため有効に使わせて頂いております。お求め頂きました墓石セットCはこれら地球上に不要な子供たち百個体分のお墓の代わりとなります。

次回は是非一千個体分のお墓の代わりとなります、「千の風になろう」セットをお求めくださいませ」

「もちろん、ここの子供たちは我が社が誇る無能力勇気栽培法によって育成された子供たちばかりです。無能力勇気栽培法は、どの国も競って開発していますがまだ成功していません。唯一成功しているのは我がニッキーランド・ジェノサイド研究室だけなのです」

博士は記者に向かって得意そうに胸を反らした。

「営業の現場から上がってくる情報を解析して、私どもジェノサイド研究室は、美味しく、かつ、食べるに値する人種の早期育成に成功いたしました。人種によりまして食べ頃があるのです。もちろん最近人気なのは10歳までの若いアーリア系人種である事は承知しております」

「しかし、博士、アーリア系は最近入手困難なのではないですか？」

「おっしゃる通りです。すでにご承知の通り、他の人肉バーガーチェーン店ではコストの安いアフリカ系人種の肉を大量に使用しておりますね」

博士は手を後ろに組み、満足そうに育成室を覗き込んだ。

「どうです、ご覧下さい。我々は市場の需要に応えるべく、長年の研究の結果、特定アーリア系人種の早期育成に成功したのです」

「先ほど仰った、無能力勇気栽培法ですね」

記者は食い入るように博士を見つめた。

「さよう」

ひと呼吸おいて、もったいぶった様子で博士は語った。

「ここに至までの道のりを思い出しますと、我がニッキーランド・ジェノサイド研究室の多難な過去を思い出さずにはいられないのです」

博士は今にも泣き出しそうな程感極まっていた。

「幾多の困難を乗り越え、我々ニッキーランド・ジェノサイド研究室だけが、この偉大な無能力勇気栽培法を実用域にまで到達せしめたのです」

博士はまるで地球を我が手で抱きとめるように、両手を広げ天を仰ぎ見た。

「我々が育成した人間は、正に人肉種としての理想型なのです。これらの個体は、ほぼ完璧に近い無能力です。これ以上ない程の、生きるに値しない人間を、遂に、ついに、このジェノサイド研究室が作り上げたのです」

博士は自分の発した言葉に酔いしれるように目を閉じた。やがて、ハンカチを取り出し二度三度目元を抑えた。

「いや、私とした事が……、失敬」

博士はやや、冷静を取り戻した。

「ご説明を続けましょう。まず、個体には幼児期に十分な栄養と、育児ロボットによるケアを行います。また、幼少期から十分なゲームプログラムを実施致します。なお、もとより、教養は必要ありませんから、文盲率は100%と、食用人肉種にふさわしい完璧な状態にあります」

「どのようなゲームを与えるのですか？」

記者はメモを取りながら博士に尋ねた。

「さよう。格闘ゲームがメインメニューですが、それに加えて我がニッキーランド・ジェノサイド研究室独自の破滅系プログラムを組み込ませてあります。ただ……」

博士はちょっと額に手を当ててコトバを区切った。

「ただ……何なのですか？」

記者は興味深そうに博士の次の言葉を待つ。

「ただ、凶暴になりすぎてしまうのが難点なのです。二個体以上を一緒にしますと、すぐに殺し合いを始めますので、ご覧のように全ての個体は個室で育成されます。これがややコスト高につながるのです。まあ、今後の課題ですな。そのため、貧田式カイゼン手法を取り入れまして、合法的に下請け組織を搾取しながら、今、開発に取り組んでいるところです」

「博士、一番重要な部分を教えてもらえませんかねえ。ほら、例のヤツですよ。どこの人肉バーガーチェーン店でも失敗したあれですよ」

記者は狡猾そうな目で、博士をチラチラとみた。

「勇気栽培法のことですな」

「それです、それ」

コホンと咳払いをしながら博士はいったん床を見つめた。清潔なクリーンルームにはもちろん塵ひとつなかった。通路を照らす天井照明は、一定の間隔で埋め込まれている。そのため通路には明るい部分と薄暗い部分が交互にあった。

博士はちょうどそのダウンライトの真下に立っていた。

博士の彫りの深い輪郭が、黒のパステルで描かれたデッサンのように、はっきりとした陰影を形作った。

「食用人種にとって欠くべからざる資質。それは死を恐れぬ心を持たせる事です。これが最も難しい」

博士は彫刻の様な顔を記者に向けた。

「申し訳ないが、これ以上はお話し出来ません。私もニッキーランドに所属しておる研究者として守秘義務がありますからな」

記者は博士の威厳溢れる姿に少なからず畏敬の念を感じたようだ。

博士は記者を次の通路へ導いた。

「まあ、仕事の話はこれぐらいにしましょう。別室で昼食をご用意しました。我がヒューマンバーガーの育成食用人肉のテイスティングが出来るのですよ。それに合うワインのセレクトもなかなかのものですよ。さあ、どうぞ」

全て壁一面ガラス張りの広々としたレストランに記者は通された。展望は抜群だ。眼下に広がる起伏にとんだ緑の大地。とうとうと流れる大河。思わず深呼吸がしたくなる。

何十と並んでいる食卓には、全て真っ白なテーブルクロスが掛けられている。この広いレストランに今日は博士と記者のふたりだけである。やがて胸に、ニッキーランドのバッジをつけたシェフとソムリエが現れた。

「お待ち申し上げておりました。どうぞごゆっくりお食事をお楽しみください」

博士と記者は席についた。ソムリエが食前酒を二人のシャンパングラスに注ぐ。スパークリン

グワインは桜色のロゼであった。

グラスを通してほのかな、幾多の気泡が見えた。それは次々に立ち現れては液面に向かってはかなく消え散ってゆく。

博士と記者はそれぞれグラスを手に持ち、軽く触れ合わせた。

シャンパングラスの触れ合う、小さく、しかし、澄んだ、純度の高い音が広い静かなレストランに響いた。

「我々の命に乾杯」

シェフはテーブルのそばで手際よく料理をつくっていった。ソムリエは忠実な下僕のように二人にワインを供してゆく。

広々としたレストラン。窓の外に広がる大自然のパノラマ。

博士と記者は静かに豊かな食事を続けた。

(続く)

人肉バーガー(1)

<http://p.booklog.jp/book/54110>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/54110>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/54110>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ